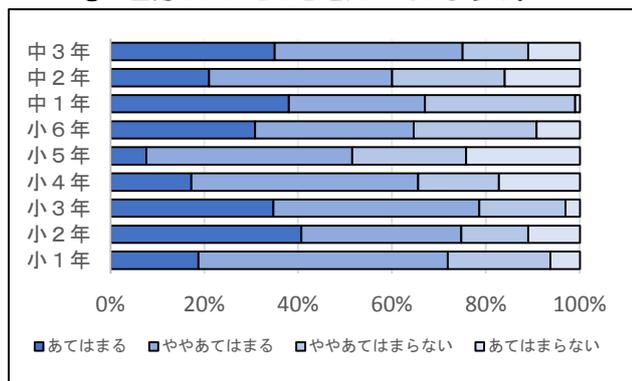


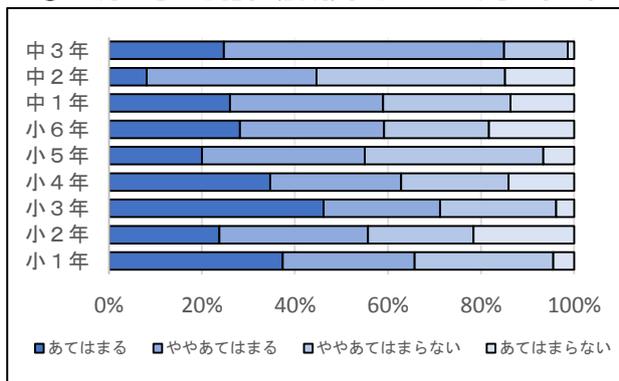
調査結果 および 考察

○ 児童生徒への意識調査

① 自分のいいところを知っていますか。



② 自分の考えを話す(説明)することは好きですか。



- ①の「あてはまる」の児童・生徒の割合は、H29年度全国学力・学習状況調査結果と比較すると低い。自己肯定感を高める必要がある。
- ②の「あてはまる」の児童・生徒の割合は、同調査での「話を聞くことが好き」と「学び合いの効果を実感している」の「あてはまる」の割合と比較すると、低い。話し合いの工夫を行い、自分を表現することのよさに気付くような手立てが必要である。
- ①②ともに、小5と中2の割合が特に低いことから、指導上の配慮を要する学年であると考えられる。

○ 小中学校教職員への意識調査 (学習指導、生徒指導、児童生徒への対応などについて)

<小学校が中学校から学びたい事>

- 教材研究や授業の仕方 ・不登校への対応
- 多感な時期の生徒に上手に向き合い話を聞くコツ
- 学年(チーム)での取組み方 ・進路指導について

<中学校が小学校から学びたい事>

- 子どもが「～したくなる。」授業づくりの秘訣
- 教材研究等の時間の作り方
- 板書の工夫 ・保護者との関係づくり

今後、この意見を共有し、小中学校教職員のつながりをさらに深めたいと考えている。

○ 中学1年生徒の評定調査 (算数・数学における現中1生の1学期の評定と小6時の学年評定との相関)

中 学 校	5		4人	9人
	4		12人	14人
	3		29人	
	2	2人	7人	
	1			
評定	1	2	3	

小学校

小6時の評定が2の子どもに着目してみると、中1では2から5までの評定に大きく分かれたことがわかる。この集団に対して適切な指導や支援を行うことが、学習面での中1ギャップを克服させる鍵ではないかと捉えている。

観点別評価を調べてみると、思考力が低い子どもほど中学校で伸び悩む傾向が見られた。

今後、他教科でも調べ、児童生徒一人一人の実態を多角的に把握し、適切な手立てを講じていくことが重要であると考えられる。

成 果

- 意識調査や評定調査をしたことで、本校区の子どもたちの実態を正確に把握することができ、子どもたちのための小中一貫教育という共通認識で、研究の構想を考えることができた。
- 9年間の系統を意識した学習指導や一貫した生活指導という視点が、教職員の中に意識化されてきた。
- 打ち合わせや合同研修の際に互いの学校を行き来する中で、それぞれの学校や教職員の様子が分かり、慣れ親しむ気持ちが出てきた。

課 題 ～実践を継続していくために～

- 本校区の特徴である幼小中一貫教育のよさを理解する研修を重ね、共通認識を深める。
- 共通実践のために、小中学校間での話し合いや打ち合わせなどの時間を十分確保する。
- 乗り入れ授業のための人員確保等の体制整備や、設備・道具の充実等の環境整備が必要である。